



今回はいよいよ始まったリニューアル工事のお話です。1978年の開院以来、当院は、一つ一つ技術を蓄積し、人を育て、着々と力を付け現在の姿

に到達しています。40年以上が経過し、老朽化対応のみならず、世の中の変化(進化)に相應しいバージョンアップが求められています。建設のコンセプトは「医療をつなぐ」「将来へつなぐ」「地域をつなぐ」で、目指すべき「2病院」の完成形は「地域包括ケア時代に輝く病院」です。本文でも触れたように、急性期医療、専門医療の対応力を強化しつつ、かかりやす

い外来と在宅支援機能の確保、これを同時に達成する手段が今回のリニューアルです。徐々に姿を変えていくその経過を、ワクワクドキドキしながら見守って頂ければ、と思います。そして、組合員と職員の協同した力で、新しい2病院が躍動出来るよう、地域での組織づくりと職員の育成に取り組んでいこうではありませんか。宜しく願い致します。



- 診察を受ける際の番号の呼び出しが聞きづらい。
- はっきり、ゆっくり、診察部屋まで

アナウンスして下さい。

- 何時間待って自分が今どのあたりにいるか不安でトイレも行かず待っています。どのくらいで順番がまわってくるか知る良い方法があればありがたいです。
- 職員の声が小さくきこえないので出来ることならマイク、又は前に出て

声をかけてください。

- 総合受付では科の紹介してくれるので助かるが、科の窓口で診療科医師に〜分ぐらいかかるなどの待ち状況がわかるようにしてもらいたいです。(複数のご意見があったため、ご意見・回答ともに趣旨が変更にならない範囲で編集しています)

ご意見いただきましたように、患者さまに待ち時間の状況をお知らせできるような仕組み、患者さまの呼び出しについて、わかりやすい方法の検討を行いたいと思います。

この度は、貴重なご意見をありがとうございました。

(外来医事課課長 田中紗代)



花粉症とコロナ

ポカポカ陽気に色とりどりの花、春は心も華やぐよい季節ですが、花粉症の方にとっては辛い季節でもありますね。しかも最近のコロナの症状は、咳・くしゃみ・鼻水・鼻づまりと花粉症によく似た症状のため、例年以上に花粉症の方にとっては気を遣う季節になりそうですね。少しでも快適に乗り切ることができるよう、早めに万全の対策をとって、花粉症と上手に付き合っていきましょう。



コロナ禍での花粉対策10のヒント

- ① 症状が出る前に早めの受診で対策開始！
- ② 症状に加えて発熱したら、耳鼻科ではなく発熱外来などの受診を！
- ③ 乾燥はウイルスの生存率をUP。加湿をしっかりと！
- ④ アウターはツルツル素材で花粉が付きにくく、落ちやすいものを！
- ⑤ 家に入るときは服やカバンに付着した花粉を落とそう！
- ⑥ 帰ったら、手洗い、洗顔、うがいの習慣を！
- ⑦ 花粉ゴーグルで侵入防止とうっかりこすりを防止しよう！
- ⑧ 目・鼻・口などをうっかり触れない 触るときは手洗い・手指消毒を！
- ⑨ 網戸やカーテン越しの換気で花粉の侵入を最小限に！
- ⑩ 早寝早起き・栄養バランスのよい食事・適度な運動で体調を整えて！



埼玉協同病院だより

季刊

ふれあい

No. 29
Spring

\\ 今回から紙面をリニューアル！ /

特集

進化する 埼玉協同病院

2026年の完成を目指して進む
リニューアル＆新病院建設工事。
埼玉協同病院はどのように
生まれ変わるのか特集します。



対談

地域包括ケア時代に
輝く2つの病院



竹中工務店

コンセプトは
3つの
つなぐ



埼玉協同病院だより

季刊 ふれあい No.29 2022年3月 Spring

〒333-0831 川口市木曽呂1317
Tel. 0570-00-4771
ホームページ <https://kyoudou-hp.com/>



民医連 埼玉民医連

医療生協さいたま 埼玉協同病院

専門医シリーズ

佐野 広美 医師

心のとびらを開いていきたい



地域包括ケア時代に輝くために 「2つの病院」に進化します。

2026年完成を目指してリニューアルと新病院建設工事がはじまった埼玉協同病院。
増田剛院長と組合員の丸山久美子さんにお話をうかがいました。



増田 剛
丸山 久美子

院長
建設委員会委員長

建設委員会副委員長
常務理事

リニューアルと、 新病院の建設がはじまる

——建設工事がいよいよはじまりました。

増田：開院して43年が経ちました。施設の老朽化や、医療安全、感染対策上の問題などが出てきています。また、埼玉県は全国で最も高齢者人口が増える率が高く、

医療や介護、福祉の必要性が今後ますます大きくなります。こうした理由から、救急やがん診療を担う現在の急性期病院として機能を一層強化すること。加えて新たに、誰もがかかりやすい外来の設置と、地域のハブになれる地域包括ケア病棟のある新病院を建設し、在宅療養支援機能を強化することで、より地域に貢献していきます。



新しい本院外観



新しい新病院外観

リニューアル
特設サイト



丸山：いま、「一般の人は大きな病院にかかれないようにしていこう」というのが国の指針のようです。しかし組合員からは、埼玉協同病院で診てもらいたいという意見が多いですね。

増田：埼玉協同病院はもともと、「だれにでも門戸が開かれていて、診療を受けられる病院をつくらう」という思いのもと、地域の人たちがお金を出しあってつくってきた病院です。リニューアルされても、2病院化することでかかりやすい外来の期待に応えていきます。

組合員と一緒にすすめてきた 病院建設

——病院建設はどのような流れですすんだのですか

増田：2年前に建設委員会を立ち上げました。委員会には建設会社の方、組合員、そして職員が参加をして、新たな病院案を検討してきました。委員会は100人規模です。

丸山：利用者の立場としては、待合室や会計の位置、病院の送迎バスの発着場所など、使いやすさが気になるものです。そうした意見も委員会で議論を深めていきました。

増田：病院の案内表示一つとって

も、こういった表示方法が利用者が迷わないだろうかという議論が起きました。その都度、新しい発見がありますね。組合員とともに議論を進めてこられたのは、医療生協の病院ならではの感想です。

夢が広がる 「きょうどうプラザ」を一等地に

——今回の建設コンセプトは「つなぐ」だそうです。

増田：はい。「医療をつなぐ」「将来へつなぐ」「地域をつなぐ」の3つの「つなぐ」です。医療生協の特徴を理解していただいた建設会社からの提案でした。そのコンセプトが具体化される一例として、病院の敷地のど真ん中の“一等地”に「きょうどうプラザ」をつくります。

丸山：きょうどうプラザには多くの組合員が期待しています。病院は、病気になったから来るところというだけではありません。健康づくりの活動や、暮らしにかかわる活動をすすめていく場所でもあるという思想を感じます。医療生協としての活動ができるわけですから、夢が広がります。

増田：もちろん災害時に避難者を受け入れられる場所としての機能も持たせます。

センター病院としての 役割をさらに発展

——センター病院としての期待もあるのでしょうか。

増田：この43年、埼玉協同病院で経験を積み重ねた医師や看護師が県内で活躍しています。医療生協さいたまは、県内に中小規模病院が3つ、診療所8つ、介護施設の事業も充実させてきました。このように埼玉協同病院は、医療生協の理念・運動を継承する人材を育てる病院としてますます成長してほしいという期待も背負っています。

丸山：この10年をみても介護事業が随分と充実してきました。介護事業をバックアップできるのも、埼玉協同病院がセンター病院としての役割を果たしているからだと思います。組合員からは、コロナ時代の大規模な投資を心配する声もあります。けれど、医師をはじめとする専門職を育てて、県全体の医療の質を総合的に高めてほしいです。

増田：もちろんです。そして、新しい病院でも「経済格差を健康格差につなげない」という思いは変わりません。埼玉協同病院は今後も地域の健康を支えていきます。



3つの「つなぐ」がキーワード

竹中工務店
吉岡 有美さん



竹中工務店
齋藤 俊一郎さん



埼玉協同病院のリニューアルと新病院建設のテーマは、3つの「つなぐ」。設計・施工を担当する竹中工務店にうかがいました。

——建設のテーマについて教えてください。

齋藤さん：テーマは、「人をつなぐ 明日へつなぐ コミュニティコア（くらしの拠点）」です。これは、「医療をつなぐ」「将来へつなぐ」「地域をつなぐ」という、3つの「つなぐ」を基盤とするコンセプトから生まれました。

——3つの「つなぐ」は、どのような思いから生まれたのでしょうか。

齋藤さん：まず、「医療をつなぐ」。これは、地域に根ざした病院として医療機能や診療体制の充実を図るほか、病院で働くスタッフ同士が連携を深める、という意味があります。リニューアルする本院と新たに建設する新病院の接点となる建物の中心に、「スタッフコア」というエリアを設け、スタッフの更衣室、医局、ラウンジを配します。このラウンジを拠点に、スタッフ同士の自然な交流や連携が生まれ、医療にもよい影響をもたらすことができると考えています。

次に、「将来へつなぐ」。今後起こりうる水害や地震に備え、一階の床を高くしたり、構造強度を高

めたりして、病院機能に支障がないように配慮しています。また、将来のレイアウト変更に対応しやすいようブレース（筋交い）などを設けない建物としています。

3つ目の「地域をつなぐ」というのは、組合員や地域の方々と病院をつなぐ、という意味です。みなさんが健康増進や地域見守りなどのために活動し、情報交換を行うための核となる「きょうどうプラザ」というオープンスペースをつくります。

——病院側との話し合いで、印象的だったことや発見したことはありますか？

吉岡さん：設計の意思決定をするステップで「建設委員会総会」という、組合員の方々から意見をいただく場があったことです。エンドユーザーでもあり、病院の運営に近い立場でもある、第三の存在の方々と直接お話をするのは、とても新鮮でした。みなさんから、農産物のバザーや健康体操などの活動をうかがい、この病院は、病気を治す場だけでなく、健康をつくる場でもあるんだ、と理解しました。

——組合員やスタッフの意見によって、新たに取り入れたものはありますか？

齋藤さん：組合員の方々のご要望をもとに、将来コミュニティバスのバス停を病院敷地内に設置できるように、ロータリーの仕様を設定しています。

吉岡さん：看護師のみなさんのご協力で、洗面化粧台を埼玉協同病院仕様に開発しました。実物大のモデルをつくり、水の流れや跳ね方、つかまりやすさなどを検証し、患者さんの使い勝手がよくなるよう、さまざまな工夫を取り入れています。

——さいごにひと言、メッセージをお願いします。

齋藤さん：2026年のグランドオープンまで、長期の建設期間となりますが、「いい病院ができたね」と言われるように、がんばってまいります。

吉岡さん：スタッフや組合員の方々の声をしっかり聞き、みなさんと一緒にいいものをつくっていききたいと思います。



掲載CGは計画段階のものであり、施工上等の理由により変更となる場合があります。提供：竹中工務店

リニューアルと新病院



Q なぜ診療所ではなく病院を建設するの？

A 協同病院周辺は川口市の市街化調整区域となっていて、規制によって診療所の建設ができません。そのため、地域包括ケア病棟をもつ外来中心の新しい病院を建設することにしました。

Q 駐車場はどのくらい？病院バスはある？

A 駐車場は協同病院と、新病院合わせて270台を予定しています。わかりやすい駐車場への案内、駐車場の空車・満車の表示など工夫をしていきます。また、東浦和駅、東川口駅からの病院バスは協同病院も新病院もそれぞれ利用できるようなルートを考えています。

Q 新型コロナなどの新しい感染症に備えは？

A 新病院では、感染症受診患者が多い時、少ない時で受診エリアや待合エリアが拡充できるようにしています。さらに大規模に感染症患者を受け入れるときは、健診エリアを封鎖して感染症対応に充てるようなつくりになっています。

組合員の声

期待したい 地域包括ケア病棟

組合員
服部 祥子さん



友人の勧めで組合員になり約45

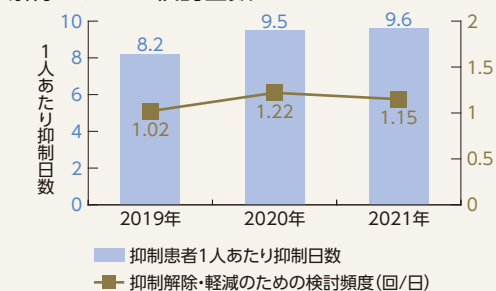
年。様々な組合員活動に関わってきました。地域の組合員を訪ね建設のお話しをする時、「新しい病院は地域包括ケア病棟ができ、患者さんやご家族のみなさんも安心して療養ができること。ワンフロアで健診が終了する健診センターもよ」と説明すると出資金にもつながり、協同病院への期待がさらに広がります。地域も組合員も高齢化が進んでいく中、一日でも早い完成が待たれています。

データで見る医療の質

認知機能が低下した 患者のケア ～身体抑制の軽減に向けて

埼玉協同病院では、医療の質改善（QI）の指標を設定して、医療水準・質の面での改善目標を決めて取り組んでいます。今回とりあげる指標は、認知機能が低下した時のケアの質についてです。

身体抑制患者の1人あたり抑制日数と
解除のための検討回数



せん妄リスクを評価し 安全と人権に配慮した適切なケアにつなげる

病状や苦痛を伴う治療、入院という環境変化によって、時間や場所が急にわからなくなったり、注意力や思考力が低下するなど一時的な意識障害を起こすことがあります。高齢者に多く、認知機能が低下した方では特に起こしやすい状態でこれをせん妄と呼びます。入院時にせん妄を起こしやすいかどうかを評価し、環境調整や接し方など含め対応を検討します。病院では、行動制限を行わないと転倒や点滴・カテーテルを抜いてしまうなど、患者の生命または身体が危険にさらされる可能性が高い場合や、行動制限以外に患者の安全を確保する方法がない場合に、やむを得ず同意を得て一時的に身体抑制を行う場合があります。ハイリスクと評価された患者は2020年132人/月、2021年120人/月で、身体抑制に至った患者はそれぞれ72人/月、64人/月です。患者一人あたりの日数と、解除・軽減のための検討頻度（抑制中の1日あたりの検討回数）を図に示しました。日数はやや延びていますが、多職種が関わって環境を整えたり見守りを強化するなど、抑制の時間を短くしたり、より制限的でない方法に変更するなど、軽減に努めています。

専門医 シリーズ 28

佐野
広美

医師 緩和ケア内科部長
日本緩和医療学会認定医（研修指導者資格）



消化器外科医として 医師デビュー

「小学校の通信簿には、『佐野君はケンカばかりして困ります』と書かれていました」

やんちゃな少年時代を振り返り、懐かしそうに目を細める、佐野広美医師。2021年に緩和ケア内科部長として着任したドクターです。

佐野医師はいま、入院、外来、緩和ケアチームで、患者さんの身体症状の緩和全般を担っています。

もともとは消化器外科医だったという佐野医師。

「医学部時代、仲の良かった先輩から『卒業後、東京に戻ってくるなら、うちの医局に来ないか』と誘われ、先輩が働く東京大学外科の消化器外科医になりました」

がんの告知をしないのが 当たり前の時代

消化器外科医として働き始めた佐野医師は、がん治療など多くの手術を手がけます。

「手術で治る方もいますが、助けられなかった方もたくさんいます。患者さんやご家族とつらい時間を共有し、この人たちのために何ができるのか、と考えるようになりました」

当時は、患者本人にがんの告知をすることが一般的ではありませんでした。また、告知はしても、余命を知らせるなんてもってのほか、という時代でした。

「何も知らされずに亡くなる人をたくさん見てきました。自分の状態がわからないまま、ただ身体の痛みに襲われ、苦しんでいる患

心のとびらを 開いていきたい

「緩和ケア」は、がん治療に伴う身体と心のつらさを和らげ、最期まで自分らしく生きることを目指す医療です。多くの患者さんに寄り添ってきた佐野医師に、緩和ケアについて聞きました。

PROFILE

1985年群馬大学医学部卒業、1985年東京大学第三外科、1992年青梅市立総合病院外科、1999年東京都職員共済組合青山病院外科、2005年医療法人財団慈生会野村病院緩和ケア内科、2021年埼玉協同病院勤務



者さんがいるんです。そんな患者さんを前にすると、医師や看護師も言葉にできないほどつらい。医師として自分の中に生まれたモヤモヤを解消できるかもしれない、という思いから、自然と緩和ケアに関心をもち、勉強するようになりました」

医局の関連病院で仕事を続け、20年ほど経ったころ、「そろそろ、慣れ親しんだ医局の外に出て、自分の道を探したい」という思いが湧いてきました。そこで、東京・三鷹市の野村病院から届いた「外科の責任者として来てほしい」というオファーを受けることにしたのでした。

地域の病院で 緩和ケア病棟を立ち上げ

「地域に根ざした小さな病院でした。『おなか痛い』『息が苦しい』と訴える80～90代の患者さんたちを、地域の病院として積極的に受け入れました。その中には、がんを患っている方がたくさんいました」

高齢の患者さんたちの手術を手がけながら、「医療と地域のつながり」や「緩和ケアの必要性」について模索し始めた佐野医師。そして緩和ケア病棟を立ち上げることに。佐野医師は、患者さんの身体と心の苦しみを和らげるだけでなく、地域の医療福祉スタッフと連携し、在宅医療の支援にも奔走しました。

佐野医師は現在、埼玉協同病院の緩和ケア病棟で、多くの患者さんと向き合い、身体症状の治療だけでなく、闘病生活で失われたそ



の人らしさを少しでも取り戻せるように努めています。

「日々、コミュニケーションの難しさを実感しています。昨年、ある患者さんが、余命半年と告知されました。彼は意気消沈し、ぼくが『何かしたいことはありますか？』『今からできることを考えましょうよ』と声をかけても、『つらい。苦しい。何もしたくない』と心を閉ざしてしまいました」

あと半年の余命、と聞かされたとき、『家族で温泉にでかけたい』『友人に会いたい』など、自分の願いを語る人は、意外と少ないそうです。苦しさに意識が向いて、本来の自分を出せなかったり、恐怖や孤独を抱えたりする方は多くいます。

その人らしい生き方は、 決して一つじゃない

「その人らしい生き方は、一つじゃないんですよね。思い出づくりをするだけが幸せな最期とは限

りません。日々、ここで生きていくことや、面会に来る家族と会うことも、その人の大事な生き方なのだと思います」

佐野医師は、患者さんに寄り添い、こんなふうに語りかけます。

「あなたの気持ち、聞いてみたい。な。もしも今、旅行できるなら、どこがいい？……ああ、いいですね。ぼくも行ってみたいなあ」

緩和ケアには、正解もゴールもありません。まずは、「今、この時間、あなたのために、ぼくはここにいますよ、と伝えること」、そして、「相手に興味をもって心のとびらを開き、共に過ごしたい」と語る佐野医師。

痛みや苦しみの中で絶望し、もう何もしたくない……そんな思いを患者さんにさせないために、できるかぎりのサポートを。限られた時間のなかで、いかに心に近づき、分かち合える存在になれるか。佐野医師の取り組みは、これからも続きます。